国際高等学校特集

教育の国際化に思う

――地球をまるく小さいものと見る視座――

上野直蔵

昨今、とみに地球が狭くなりました。それが実感としてうけとめられます。もちろん交通機関や情報機関が長足の発展をとげて、海の向う、山の向うの国々への往復（ゆきき）や連絡が短時間で行われるようになったことにもよりますが、昔日は考えられもしなかった地球の全面写真――月面から撮ったものや、宇宙衛星からとったもの――をつくづく眺めていますと、そういう実感が湧いてきます。地球はまるい、と今更ながら思いますし、その球体が、ぽっかりと宇宙空間に浮かんでいると、その地球の狭さを否応なしに思い知らされます。このまるい球体での人間や人間社会どうしの愛憎、喜怒哀楽が、空しい、というか、滑稽にさえ感じ、ふっと神の視座とはこのようなものかと思ったりします。

国際主義、というのは、もはや理想主義でもなければ、未来のユートピア渇望でもありません。現実も、現実。生活にぴったり密着した思考法でもあるのです。そういう国際主義が教育に生かさ

れないこと自体がおかしいし、教育そのものが国際的視野のなかにおさまらなければ教育の名に値いしなくなるでしょう。教育というものはおそろしいもので、明治の日本がもっとも力を注いだ分野でありますが、おかげで、抜きがたい閉鎖思考とシャーマニズムを歴代の若者にうえつけ、のっぴきならない忠君愛国思想を戦争というかたちで噴出させるのに力あったものであります。宇宙に浮ぶ地球を眺めていると、そういう一国単位の一国の利害中心の教育がそらおそろしくなります。

国際主義というからには、諸国家、諸国民の理解や友情をふまえた、およそ人間営為の総体をさすものでありましょうが、従来、と申しますが、明治以来の、といってもよいでしょう、日本の国際的感覚というのは専ら先進ヨーロッパ諸国やアメリカなどの文物、文明に追いつき追い越すための思考方式のようにうけとめられていた嫌いがあります。教育機関におきましても、もっぱら西洋先進国から宣教師や著名学者をまねき、高きが低きにおちる自然現象そのままの文化受容をもって教育の国際化と考えている向きがないでもありませんでした。もっぱら受け皿となって国際交流を教育の分野に生かす、ということであります。ナショナルな利害のためにインターナショナルをねらうということだったのでしょうか。

一口に教育を国際化させる、といっても、具体的な制度の問題はおきますが、理念的にはいろいろのことが考えられます。人類の平和と幸福を志向して各国民の友好関係を維持発展させようとする人物の育成でありましょう。また諸民族、諸国家の固有の文化を理解し、価値観の相違を相互理解しうるような基礎的精神構造の教育といってもよろしい。大学教育や研究機関では、人物交流、情報交換によって相互の研究・教育を発展させ、新しい価値を創造していく、というようなことも考えられます。ざっくばらんに申しますと、こういう理念は、唱えるぶんには朗々として耳にここ

ちよいのでありますが、綺麗なお題目じみていることも確かであります。それをお題目たらしめないためには、それに携わる人々の実行力は当然、財政その他の裏づけが当然必要となってまいります。

しかし、私は、そういう教育の国際化についてのお題目を支えているもっと基本的な当事者の心のもち方、というものについて考えてみるべきだと思っております。所詮、国際交流ということは、人と人との交わりだ、ということから出発しなくてはならないのではないでしょうか。人と人との理解という基本から出発することが人間教育の根幹にあり、特に教育の国際化と開き直る必要もないくらいであります。相手の立場になってものを考える姿勢、自分の立場の理解だけを相手に求めない姿勢といってもよろしいでしょう。それは個人対個人間における愛と善意とからくる信頼関係であります。先程、まるい地球が宇宙空間にぽっかり浮かんでいるのを見ると、これこそが神の視座ではないかと思う、と申し上げましたが、まるい地球を眺める神の目を各人に設定する、まさにこれこそが、あえて教育の国際化と申し上げてもいいでしょう。異質な価値観をもっている相手を理解する日常性を教育の場で押しすすめていくこと。このことは結局、異民族の一見肌にあわない思考方法への理解につながっていくでしょう。

かつて、テレビを漠然とみておりまして、ある人物がアフリカのさる土人と協同生活をしているルポタージュ風の番組に出くわしました。彼らは牛の糞で家屋の屋根を葺き、壁を塗る、というのです。われわれ側からの文明の視点でこれを解釈しますと、汚い、臭い、不潔、不衛生というような声がきこえてくるようですし、また顰（しか）め っ面も想像できます。しかし、かのアフリカ土人の生活の中では、これは厳然たる合理性をもっているのだそうです。この牛糞が、乾燥期には湿

気を放出してくれるし、湿期にはその湿りを吸いとってくれるのだそうです。そうした異民族の異質習慣、思考を理解する努力なしに生理的な嫌悪感が優先するようでは国際主義のお題目も泣きますし、教育を国際化して制度をいくらいじっても真の国際主義の確立はほど遠いことになりましょう。そういう意味で、教育を国際化させる、という目的の基底部分には、神の視座からものを見る愛や、物事への善意による感受性の育成が必要でありましょう。われわれの側からだけのこころよい文明、ナショナルな利害意識からでしか理解できない文化の交流のための今までの教育では足らざるものありと言ってもよいかと思います。すくなくとも従来物質文明の点から言って開発途上や低開発の国々の人々に対する相互理解という姿勢もこれからの教育に必要でしょう。われわれの常識ではにわかに理解しにくい思考を理解し、加えて、その異質の度合のぶんだけの相手のわれわれに対する不理解を、われわれの側から解いていく努力、どうも日本も含めて、先進国のにおいのする諸国は、この努力に従来欠けていて、どんどん低きところに自分の側からの思考を押しつけてきたように思うのです。

さすがに昨今の若い人々は、狭くなった地球を存分に利用して、東西南北に人間関係を求めていくようです。物怖（ものおじ）や、しりごみ、生理的な嫌悪感もなく、行って、見て、生きて、理解して、理解させ、という体験的自己形成をヴァイタルにしております。たのもしく、うれしいことであると思います。

ひと頃は、日本へやって来る青い目の外人さんは、日本語を勉強しないでのこのこやって来る人が多かった。僻（ひが）むようですが、英語が喋れない人は人にあらず、ぐらいの心理があったのではないでしょうか。さすが最近は、日常生活にはまず支障がない程度の日本語の素養をつんで来

日し、滞在してくださる。これもうれしいことであると思います。

よく一定の外国語を学ぶと、その外国語が母国語である国の文化にかぶれるというようなことを申します。かぶれる、というのは非難の言葉なのですが、私は、このかぶれるということはよいことだと思っています。かぶれるほど学ばないとその国の人々の思考や精神の仕組は理解できないのです。かぶれる、というのは一時の現象でありまして、やがて皮膚の炎症のように元通りになる。元通りになった時点で、かぶれた経験を生かせて、こんどは、自分の国のことを相手に理解させよう、という発想が生れてくる。

さあ、ここで教育の国際化といい、国際主義教育といい、外国語と自国語の学習という問題が起ってくるわけであります。

人間は他の動物とちがって、意志や思考の伝達を声の抑揚や体の動かしだけによっていたしません。言語という実に不可思議な複雑な体系によってなしとげてきました。諸民族はそれなりの環境の中で、独特の言語を発達させてきました。今、教育の国際化の名のもとに相手の国を理解するのに、言語から入っていくのがもっとも根本的、原則的な方法である所以であります。相手を知るにも、相手に知らしむるにも言葉は必須の要件です。パック・ヨーロッパ旅行で、結局一言も外国語を話さず、したがって訪れた国の人々に言葉で接せず、「エイゴナゾシラナクテモ、ワガハイハ…」と豪快ぶって帰国してみても、結局、お茶漬と味噌汁、梅干だけが自分の趣好という思考法を頑(かたくな)にまもっただけで、何ひとつ外国旅行の実質的なお土産はもちかえらなかったことになります。外国旅行の収穫は、ウヰスキーやライター、香水類だけでは困るのです。

訪れ、交渉し、つきあおうとする当該国の言葉、これを大切にし、学び、夢中に学び……。当り

前のこと、しかし、したたかに苦しい努力。これを再度教育の分野では確認したいものと思います。

究極には教育の国際化ということの基本部分には、空間にぽっかりと浮いたまるい地球を、まさにまるい小さい球体とうけとめる神の視座が必要でありましょう。

（同志社総長・理事長）

国際高等学校開校半年を経て

仁井国雄

(1)開校までの経過概要

キリスト教主義、国際主義の同志社は、創立百周年記念事業の一つとして国際高等学校を設置したが、その開校に至るまでの経過概要は次の通りである。

昭和四十九年十月　記念事業委員会、帰国子女教育問題をとり上げる

五十三年一月　理事会、帰国子女教育検討委員会を設置
五十三年三月　委員会、学内中高への併設でなく独立の帰国子女教育機関が望ましい旨の答申書を提出
五十三年五月　理事会　帰国子女教育機関設置を決定
六月　帰国子女教育委員会、専門委員会　帰国子女教育機関設置準備室を設置
同月　文部大臣に国庫助成交付要望書提出
五十四年五月　校舎起工式（廿一日）知事に設置認可を申請　十二月設置認可（三日）
五十五年二月　入学試験（十六日）　四月　開校式入学式（十四日）

(2)開校後の状況

帰国生徒（廿三か国）六十六名、一般生徒六十六名で開校したが、編入生を加えて、八月現在で、帰国生徒（廿五か国）八十三名、一般生徒六十六名、合計一四九名が在籍する（教員は専任十八名、講師九名、職員は寮を含めて十名）。また生徒の六割が寮生活を送りその大部分は帰国生徒であるため、本校には学内他中高とちがうスクールカラーが生まれつつある。たとえば英語、数学I、現代国語は計画通りプレスメント・テストと面接により習熟度別編成であるため、五学級が七クラスに分けられる。すでに一学期中間考査の結果に基づき、若干のグレードアップとダウンがあった。理科や社会等の授業では、帰国生徒のために術語の英訳を板書するが、その頻度が大きくなって一般生徒が頭を痛めることもあった。掲示板には日英両文の掲示が見受けられる。服装は自由にしたが、予想以上に質素で、ピアス、マニキュア、化粧は生徒相互間の討論で、いち早く姿を消

した。ネックレスは残っているが、勉学を妨げず他人の迷惑にならぬ限り、現地での習俗を敢て否定する必要はないと思う。

キリスト教に対する関心の大きいことは予想以上であった。毎朝の礼拝や週一回の寮生対象の旧約聖書講読には熱心に参加している。海外で教会生活をした者が少なく、キリスト教に触れていないことが一因であろうか。健康管理面では、開校後一ヵ月あたりで、風土の相違から体調をこわす寮生がいたが、大きな事故もなく経過しているのは、感謝すべきことである。

生徒も教職員も「帰国生徒受け入れ高校」を初めて体験し、とまどいながらも設立の目的を忘れず、眼前の諸問題への対応に全力を注入している間に、一学期末を迎えたというのが実情である。多忙な学校生活の中から感じとれる大きな課題について触れてみる。

(3)直面する課題

帰国生徒が海外で身につけてきた「国際性の維持」と、彼等を指導して「国内教育体制への適応」をさせること。(国際理解の促進をつけ加えてもよい)この二項目が、帰国生本人の非常な努力によって、見事に両立を果すだろうと見こまれる帰国生徒は少くない。しかし、このままでは両立は困難と危惧される生徒が存在することも事実である。英語、フランス語などを流暢に話し、日本人離れした発想を示す生徒が、漢字に苦しみ、生物の最初の授業は中国語のようにきこえたという。先輩校の例でみても、アメリカに帰りたいとか、海外で過した日々は「日本の学業にたちおくれた日々」であったという訴えがある。国内の厳しい受験戦争を思えば、国際性の維持は、サッパリ諦めて、ひたすらに詰めこみ教育をする方が、本人のためになるのでないかという考えも成り立

つ。海外でのゆとりのある教育と、国内の教育体制とでは、（教育内容の価値評価は別として）大きな隔たりがあり、両立は困難であるとの判断もできよう。

しかし本校では短絡的な判断は避けたいと思う。そして全生徒に同一カリキュラムを課し、習熟度別クラス編成、補講、課題等による指導だけでは、効果に限界があるという判断に立って、帰国生徒むけ、一般生徒むけの複数カリキュラムの作成によって、この課題にこたえようと検討を始めている。具体的には、昭和五十七年度よりの新カリキュラム実施の段階での大幅な選択制の採用によって、個人別時間割の実施を考えている。それは評価の統一性、スタッフ確保、時間割作成等での困難が予測されるが、生徒一人一人が最適の時間割で学習できるようにしたい。

五十五、五十六年度については、習熟度別クラス編成や補講、課題に加えて、取り出し授業を確実に行う方向を研修会で確認し、二学期から実施している。

それは本人の卒業後の進路を確認した上で、そして教育法規の許す範囲内に於てではあるが、本人に最適と思われる時間割を組んでゆくことである。いづれにせよ、学校として最大限の努力をし、生徒が、「先生、この学校は普通の学校と変りませんね」でなくて「この学校は普通の学校とはちがいますね。」と発言することを、切に望むものである。

（同志社国際高等学校長）

《座談会》帰国子女教育を語る

出席者（ABC順）

京都産業大学教授　花井　等
海外子女教育振興財団関西分室室長　松岡貞良
国際高等学校校長　仁井国雄
大学文学部教授　大下尚一
大学文学部助教授　クラウス・シュペネマン
（司会）大学神学部教授　竹中正夫

国際化時代の日本

竹中　お集まりの先生方、もうご存じと思いますが、仁井先生には国際高校の、以前からは室長として、現在は校長としてご尽力いただいております。シュペネマン先生はドイツからいらして、下鴨の小学校のPTAの会長の経験から『男の子のしつけ方』という本を書かれてカッパブックスでベストセラーになっています。

仁井　坊ちゃんは私の学校の一年生におられます。奥様はドイツ語を毎週教えていただき、……保護者であり、先生です。

竹中　大下先生はアメリカ研究所の所長を長くしていらっしゃいまして、この秋からはプリンストンにいらっしゃる、そんな間際をひっぱり出してすみません。アメリカ研究の専門家でいらっしゃいます。花井先生は産業大学教授、国際政治学のご専門でありまして、お忙しいところをありがとうございました。松岡さんは海外子女教育振興財団――またこの財団についてあとでお話しくださったらありがたいのですが、その関西の分室の室長をしておられます。

花井　東京の山王ビルにあるあれでございますか。

松岡　あれが本部で、私のほうは関西分室でございます。

竹中　きょうのテーマは「帰国子女教育」ということですが、はじめに、そういう時代――われわれは「国際化時代」というようなことを申しますけれどもその中における日本人ということを考えてみたいと思います。

花井　去年、東京サミットがありました。これはやはり、日本が国際社会で指導的な役割りを果たさざるをえないという意味で画期的なイベントだったと思いますね。これまで日本は非常に大きな国力を、とくに経済力を持っているにもかかわらず、そういう国際的な役割りというものをあいまいにし、かつその役割りを果たすことを逃げまわってきた。しかし去年の東京サミットでそれが回避することができなくなったという意味では、非常に重大なイベントだったと思います。さらに今年はベネチアでサミットがあった。これは従来の経済サミットとはちがって、アフガニスタン問題、イラン問題などを含む政治問題になった。そうすると日本はいまや経済だけでなく、政治的にも国際的な役割りを担わざるをえない。

そのベネチア・サミット後たまたま大平さんが亡くなって、急遽大平さんの名代として出た大来さんが、昔の満州の大連の出身ですね。いわば、きょうのテーマになる帰国子女のある変形パイオニアであるということになりますね。ですから、日本が国際的な役割りを担わんならんようになってきた、そのときに、いわば帰国子女のはしりが国家を代表して会議に出ているというのは非常に意味があるような気がしますね。

日本がこのところ急速に国際的な役割りを担わなきゃならないにもかかわらず、その体制はまだ十分に整っていないということを痛感しました。

竹中　たしか大来さんは大連の大広場（おおひろば）小学校の卒業生で、大臣になったときは、その小学校からお祝いの手紙が来たそうですね。

花井　国際化の時代に大来さんのような人が出てきたということが、あるいはきょうのテーマを考えるうえでも非常に意味があるのじゃないでしょうかね。

シュペネマン　たしかに先生がおっしゃったように、日本はもっと国際的にならなければならないという事実があるわけですが、経済的にもいま世界の第一か第二ですが、政治的にほとんど活躍していないと言えますね。私はこのあいだの東京サミットを見ますと非常におもしろいのは、たとえば大平と、ほかの世界のリーダーたちが並んでるところを見ますと、妙に日本人の場合、受け身という態度が強いんですね。ほかの人々は、わりあいに簡単にこうしましょうと、イニシアティブをとって非常にアクティブですが、日本はほかの人が動くまで、ぎりぎりまで待って、それに適当に合わして行動するわけですね。これはほとんど、どんな国際的な問題でもそうではないかと思います。それは日本の伝統と関係があるかもしれませんが、いまの教育制度のひとつの結果だと言えるかもしれませんね。ですから、個性というのは適当ではない言葉ですが、もうすこしアクティブといいますか、イニシアティブをとるタイプ、とれるタイプが必要ではないかと思いますね。

竹中　先般国連の人事局長のジェームス・ジョナーという人が日本に来られまして、日本人をスカウトに来たと。国連には専門職以

上の職員が二、八〇〇人いる。そのうちアメリカがいちばん多くて五二〇人で、次がソ連の一八〇人。職員の数は分担金の率に応ずるそうですね。ですからその率が一位、二位は米ソですから当然なんですけれども、分担金の第三位は日本だそうです。ところが日本の職員は七九人で六位にとどまっていて、望ましい範囲は一四八人から二〇〇人ぐらいだけれども、その下限の半分にもなってない。日本より分担金の低いフランスや英国のほうがたくさんの人を国連に送っているというようなことで、日本にどうぞいい人を送ってくれと頼みに来ているのですね。やはり国際社会のなかに行って枢要な地位をゆだねられて積極的に貢献するような人材が、もっと日本から自然に出てくる必要があると思いますね。

松岡　海外子女教育とか帰国子女教育ということが脚光を浴びてまいりましてから、まだ一五年ぐらいしか経過していない。ひとつの例といたしまして、文部省も本腰になってこの方面に力を入れだしたのが五三年ですね。昭和五三年から海外派遣教師の身分が安定したわけです。それ以前にも派遣されておりましたけれども、それぞれ府県まちまちの待遇を受けて、休職で行ったり、あるいは何割支給ということで行ったりしていましたが、五三年から全部三年を原則として海外に派遣されるようになりました。もうすでに帰国した教師たちが全国で一、〇〇〇名に達しております。それで帰国教師の会の結成をみております。そういう一例を挙げてみましても海外子女教育、帰国子女教育というものは、新しい課題であることがわかります。

ただ私、いつも疑問に思っていますことは、国際人というのはどういうような人だろうか。バイリンガルとか何とか申しますけど、日本の文化も理解する、相手の国の異質的な文化も理解し、そういうことがいわれています。帰国子女教育の重要問題として文部省は三つ課題を挙げています。ひとつはわが国の国内教育への適応をいかにするか。第二は子供達が海外で得た貴重な体験をいかにこちらで生かすか。最後に、いま話題になっております国際理解を促進するについてはいかにすべきか。こういうような三点を挙げておるわけですが、ところが、私のところへたくさん相談にみえて、ひと月に約六、七〇件、

仁井国雄氏

ありますが、国内教育志向型の保護者が多いですね。

海外の日本人子女教育

松岡　この機会にちょっと申し上げますけど、これは昨年度の発表でございます。ここに御参考までに海外日本人学校で学んでいる生徒の統計がありますのでもってきました。

竹中　これによりますと海外の日本人学校で、小学校部門で勉強している生徒が九、九八六で、中学部門が二、三七九、補習授業児童生徒が小学校だと八、二七二で、中学が一、四六四とこういうことですか。

仁井　まだ収容できなくて待っている人がおります。ニューヨークの日本人学校なんか、ウェイティングがものすごく多いですね。シンガポールも……。

竹中　これは主に日本人学校でとらえた数字ですね。ですから日本人学校もない、あるいは意図的に日本人学校に行かない海外子女もたくさんあるということですか。

仁井　そうです。最低これだけいると…。

松岡　海外に行っておる小中の生徒で、約二〇％は補習校にも日本人学校にも行っておりませんから、いま仁井先生がおっしゃったように、これ以外にたくさんおるわけです。補習校のいちばん最後の七一、七二校のプエルトリコとチュニスは、まだ六月ごろ開校したところもございまして、ここの報告が届いておりませんので人数が抜けております。

仁井　外務省の統計では、昭和五五年度、海外にいる義務教育年齢相当の子供が二七、四六五人で、前年より三、一七六人（一三・一％）増えています。これは年々ふえていくだろうということですね。

松岡　帰国子女数を申し上げますと、五一年度が四、五九八名、五二年度五、七六六名、五三年度が六、五〇八名、五四年度が、六、五六四名これだけが帰国してくるわけです。

ご参考までに、五三年度の六、五〇八名の内訳を申しますと、首都圏に四、四二四名帰っております。これが六八％、それから阪神地区に七五二名、一一・七％、中京あるいは福岡その他に一、三二五名、二〇・三％となっておりまして、最近の傾向は関西の経済界の地盤の浮上に関係してだんだんと阪神地区に帰る人びとが多くなる傾向がみられます。

海外子女教育の問題

シュペネマン　ここでの問題ですが、私の想像は、外国にある日本人学校から帰る子供は必ずしも国際人にならないということです。

竹中　自動的になるとはかぎらないということですか。

シュペネマン　はい。日本にいるドイツ人、アメリカ人、インド人、フランス人など、とくに関西の場合は多数知ってますが、その子供がここのアメリカ学校とドイツ学校に行ってますが、非常に日本に対する偏見が強いです。それは、問題は学校よりも家庭です。親が日本語が全然できないか、またはほとんどできない。職場で日本人と一緒に仕事

しなきゃならないけれども、コミュニケーションは全部英語です。英語は日本人もドイツ人も不自由ですが、したがってたえず誤解があるわけです。言葉だけでなく互いに理解できない。結局仕事になりますと、ドイツ人は自分のドイツにある会社に対して責任があるから、当然なことにドイツ人としてここで仕事するわけです。

ですから、そのドイツ人は日本のことをまったく知らない。文化的に日本はおもしろいんです。それで相当なお金をもらっているから、日本の骨董品とか買って自分の家をそれで飾るわけです。ところが日本人の考え方とかほとんど知らない。そして自分の職場で日本人と十分接触しなければならないので、家に帰りますとまったく接触がないです。そして接触したくない。だから外国人同士ばかりです。その偏見が子供のほうに移るわけです。学校の先生も日本のこと知らない。そのうえに、いつか自分の国へ帰らなきゃならないという心配があって、どんどん勉強させるわけです。

クラウス・シュペネマン氏

私はこっちにいて、その経験がないのですけども、ドイツでちょっと接触があった、たとえばデュッセルドルフにある日本の学校の先生方と生徒を見ますと、まったく同じことです。ですから、こういう日本人学校における教育は国際教育にならないという心配があるわけです。

大下　いまシュペネマン先生がおっしゃったことは、大切な点ですね。私もそういう傾向がずいぶんあるだろうと思います。しかし、いまそれが商社などの関係で海外に住んでいる人たちの間でも、多少反省されてきている。どこの大きな町に行っても日本人の特別に集まっている地域ができるというようなやり方、あるいはむこうの一般の市民と広い意味で交流をする能力がないとか、そういうことへの反省がかなりされているようです。海外にいる日本人の親たちの意識が変わってきますと、いまシュペネマンさんがおっしゃったような問題がだいぶ緩和されてくるだろうと考えるのです。

それから、国際化社会というのは、外国に日本人がたくさん出て行くだけじゃなしに、日本の社会自体が国際的な社会のなかに巻きこまれていくわけで、選挙で投票するときでも、さっき花井先生がおっしゃったような国際的政治選択を国民がしていく時代になっていきますから、帰国子女が将来どう育つかというのは、その人たちがまた海外に出て活躍するということがなくても、日本の社会にとって非常に意味があると思うんですね。そこで、よけいにシュペネマンさんがおっしゃったようなことが心配なので…。

花井　さっき、日本が急速に国際的な役割りを担わなきゃならなくなってきたにもかかわらず、それに対する準備が整っていないということを申し上げましたけども、これは日本の地理的、歴史的条件から、そういうある種の宿命みたいなものを負っているわけですね。このことは、正直言ってちょっとやそっとで直らんのじゃないかという気がするわけです。

花井　等氏

潜在的なたまもの

花井　一時期シンガポールで教えておりました。そのときに非常に感じたのは、淡路島ほどのあの小さな国の中で公用語が四つある。テレビでニュースが始まりますと、まず一五分間英語でやる。同じことを次は中国語でやる。その次の一五分間はマレー語でやる。最後に一五分間、インドの方言でやる。同じことを四回やっているわけですね。あれを見まして、一面えらくむだなことせんならんなと思うと同時に、この国にはいろんな人が住んでて、おのずからそこに国際社会ができている。小学生のときから少なくとも二つの言葉をバイリングアルに勉強しなきゃならんということですから、いながらにして、ある意味では国際主義ができるという環境にあるわけですね。あの狭い所にいながらにして。シンガポールの場合は極端にしても、アメリカでもどこの国でも大なり小なり他国と接し、場合によっては国内に多元的な人種構成があるということで、日本に比べればはるかに国際人になりやすい条件があると思うんですね。

日本の場合には、外国に行く以外、ちょっとそういうチャンスがないということですから、そういう意味で帰国子女というのはじつに貴重な存在でしてね。必ずしも、おっしゃるとおりに、外国にいるからそれだけで国際人になるかといったらそれはちがうかもしれない。しかし国際人になる潜在力は、少なくとも日本で生まれ育ち、海外に行くことのできない普通の子女に比べればものすごいアドバンテージを持っているわけですね。問題は、そういう潜在的アドバンテージを日本の教育が押しこめてしまうか、あるいはそれを開花させるかということによって、日本にとって将来たいへんな寄与をするか、まったく宝の持ちぐされで終わるかということだと思いますね。現在のところは、どうも閉じこめてしまって、いまおっしゃいましたように、すぐ帰ってきて受験に合わせようというような姿勢をとらざるをえない社会をつくっている。そういうところを手直しすることによって、潜在的なアドバンテージを持った子供たちが、そのアドバンテージを開花させる教育のシステムをどうするか。その如何によっては、これは二十一世紀の日本にとって大変な力になるんですね。

牛場さんが対外経済相をやりましたときに海外で評判になって、かれ一人の存在で戦艦一隻にあたるということを言われているわけですね。あの縦横の活躍は欧米で高く評価された。だから、こういう帰国子女のなかから仮に五〇人出てくると、へんな話ですが戦艦五〇隻にあたる。それだけ国防費が削減できるということですからね。そのことを見越して費用をそのために充てれば、非常に日本の前途は明るくなるのじゃないですかね（笑）。

帰国子女教育の在り方

仁井　このあいだ、文部省の係官が言っておられましたが、帰国子女は金の卵だというんですね。卵がうまく孵るか孵らぬかという

問題がありますけれども、帰ってから卵が孵るか、あるいは帰国子女がその特性を発揮できるかどうか、そこに大きな問題があるんです。私どもの学校も、それからＩＣＵも暁星国際高校も、それが主目的で開校したわけですが、さきほど松岡先生おっしゃいましたが、国内教育への適応、それから海外経験を生かすということは、言葉自身は非常に美しいし、そのとおりなんですけども、これを両立するのは非常にむずかしいことを、わずか三月間ですけれども感じてきました。困難があるけれども、こういう国際社会ですからやらざるをえない、あるいはやる必要があるということは間違いないです。

松岡　海外における全日制日本人学校がよく問題にされますけど、閉じこめられたような日本人学校、そしてこちらに帰ったときのことを考えて、依然として国内の小中に負けないようにという適応意識が強くはたらいています。最近になって、それじゃいかん、せっかくむこうにおるんだから、むこうの学校と交流してそれで運営をしなければならないというようなことが各地区の校長会なんかの話題にのりまして、だんだん改善されつつあるでしょうけども、保護者の方のものすごい要求がございますからね。それを打破しなかったらなかなか困難じゃないか。

松岡貞良氏

過去五年間、私共の財団が帰国子女学級という名前で、長年いらっしゃった方のお世話にあたりました。三二一名修了して出ております。国際社会に生きる基盤を培って帰っておるんだから、もっとおおらかに私はまいりたいというような保護者は、三二一名のうちに数名しかおりませんでしたよ。そういうことをしみじみ考えました。

それから先進諸国にゆくと、日本人は妙にむこうさんを高く評価し、開発途上国では、どうしてかむこうのお子たちを蔑視する傾向が残っておる。日墨学院でその点を打破しようとして、画期的に現地の生徒も一緒に勉強するということで四年目を迎えておりますが、三年間大阪から行った先生のお話を聞いてみますと、実際はこれからの問題でしょうけども、それが根強いそうですね。

竹中　私もフィリピンのマニラの日本人学校に見学に行きました。新築の校舎で、九億円ほどかかった、スイミングプールもあるりっぱな学校ですね。日本の企業や、日本の政府が援助して建てられたものです。

ここではタガログ語を勉強してますかと一緒に行ったマニラの青年がたずねました。タガログ語を勉強しておらんという返事でした。せっかくマニラに来て三年、四年いる人がわれわれの言葉を勉強してくれてない、残念だな、これは植民地の学校ですなと、同行の青年が言いました。しかし校長先生に言わせると、それはいいですけど、日本に帰って、日本の学校でタガログ語のできる者を優遇してくれますか、適応にならんというわけですね。こうした悪循環はほんとにあると思いますね。

大下　さきほどおっしゃった牛場さんとか大来さんとか、そういう国際人はこれからもっともっと必要になる。これはいわゆる戦艦

級ですけど、日本が国際社会に生きる力が強くなるためには、開発途上国のようなところへどんどんと出かけていって活躍するような人材が必要だと思うんですね。その力がふえてこないと、日本の国際化というのは、結局外国から受けいれられないものになる。そのような人材が帰国子女のなかから出てくるかどうかということを、ぼくは以前からずいぶん疑問を持っていたのです。

帰国子女の将来とも大いに関係がありますが、日本の社会が、花井先生もおっしゃったように非常に閉鎖的な面をもっているということ、この閉鎖性を脱皮する力をいつも養っていかないとだめですね。このあいだ亡くなられた沢田美喜さんのエリザベス・サンダース・ホームで育てられた混血の人たちはいくらよい素養をもっていても、日本の社会は、なかなかうけ入れない。せいぜい活躍できるのはタレントの世界ぐらいですよ。日本には、こういう風土がありますからね。

閉鎖性の打破

花井　いま、どっちかというと、国際化についてはかなり悲観的意見が出ているわけですね。ひとつは日本が閉鎖的な社会であるということ、またそういうなかで帰国子女が必ずしも国際人にはなりにくいのではないか、あるいは開発途上国などに行くと、もっとそういうことが言えるというようなお話が出てきているのですけれども、私はそれをいちおう認めますけれども、それにもかかわらず、かなり楽観的なんですね。

というのは、私事を申し上げてたいへん恐縮なんですけども、私は大連の育ちでして、竹中先生もたしか大連育ちですね。いわゆるコロニアル・スクールです、そこで勉強した人間というのは。さっきの大来さんとか東大の向坊総長とかいうのが一つゼネレーションの上のほうなんですが、最近、国際的な学問の分野、あるいは政治、あるいは経済、ビジネスの世界で仕事している人に会いますと非常にめだつことは、戦前、外国とくに中国とか台湾とかで教育を受けた人が多いのですね。こういう人たちはほんとに当時の閉鎖的な社会にあり、コロニアル・スクールに育って、たとえば大来さんの場合は小学校だけ出て、すぐ東京の一中へ行っちゃってるわけですね。非常に日本志向型なんですね。だけども、そういういま以上に閉鎖的な社会であるにもかかわらず、相当多くの人材を出している。

こういう人たちの共通の行動は、要するに簡単に言うと、外国人に会って物おじしないということに尽きるのですね。言葉ができるとか、外人とうまく接触できるとか、そういう枝葉末節のことはさておきまして、外人に会って物おじしないということはみんな共通しているんですね。いまの時代、たとえ閉鎖的な日本人学校のなかで育ってましても、あるいは帰ってきて、せっかくの能力が伸ばせないという状態であっても、ぼくは必ずそこから人材が出てくるという意味では楽観論を持っているのです。それは自分たちの経験から言いましてもね。ただ、それでよいという

大下尚一氏

のじゃなくて、そのうえで受入れの態勢とかそういうことを改めていけば、それが何倍にもふえてくるということなんですね。

これは時間のかかることです。二〇年位たってもう一ぺんこういう座談会をやりますと、あのときずいぶん悲観論が出たけれども、よくやったものだなということに必ずなると思っているのですけどね。

竹中　私の狭いサークルでも、キリスト教会で国際的に働いている人たちを挙げますと、なにか不思議なぐらいに、海外で生まれたり育った人たちが多いんです。たとえばNCC（日本キリスト教協議会）の前総幹事で、いまはアジアのキリスト教協議会の議長をしてます、中島正昭さんは、お父さんはフィリピンの牧師で、フィリピンで死んだ人です。それから神戸のYMCAの今井鎮雄総主事は、YMCAきっての国際人ですね。この人は大連の出身です。東京神学大学でエキュメニカルな課題を推進している熊沢義宣さんはニューヨークで生まれた人です。前の日本聖書協会の総主事で、アムネスティ運動やアジアでも非常に活躍した新見宏さんは、大連育ちです。それから同志社に関係のある武間兄弟ですね。謙太郎君と亨次君。これは国際的に活躍している日本人です。亨次君はニューヨークの合同長老派の重要ポストで働いています。そしてジェネバで働いた謙太郎君は、カルカッタで生まれた人でした。三つ子の魂かもしれないけれども、はだで国際性のなかで生まれ育ったものがあるように思います。もちろん、そうじゃない人たちもずいぶんたくさんいると思いますから、シュペネマンさんがおっしゃるように自動的になっているとは言えないけれども、そういう根は大いにあるということはいえると思うのですが、どうですか。

竹中正夫氏

国際化の条件

シュペネマン　以前と現在のひとつの違いがあると思います。三〇年、四〇年、五〇年前に外国で生まれて、外国教育も受けた人と、いまの商社マンの子供はまたちがいます。その違いは、ひとつは商社マンの生活水準は、以前の人たちの生活水準とかなりちがうと思います。たとえばこっちにいるドイツ人を見ますと、日本人よりもずっと高いレベルに立って生活しているわけです。神戸で自分の小さいコロニーを持って、ドイツで普通のサラリーマンである人が、こっちで社長みたいな生活しているわけです。だから上から下のほうへ見るわけです。当然なことに子供がそういう生活を受け入れて、自分の文化が周りの文化よりも程度が高いという見方になるわけです。これは国際的な態度にならない。国際的になることの条件は、日本人でありながら、自分の文化をよく理解しながら、同じレベルとして見た文化とぶつかって、社会とぶつかって、そこで日本人として成長する、それは国際的になると思います。ところがいまの子供はそうじゃなくて、高い台に置かれた温室のなかにいて、そこでドイツ、アメリカまたは日本の社会と文化を自分のチャレンジとしてなかなか見られない、それが問

題です。

ですから、以前、日本人の宣教師としてアメリカか東南アジアへ行って、そこで家族と一緒に、地元の人のレベルにほとんどいって生活するとまた全然ちがう。問題は、私の理解ではいまの商社マンです。これは主な人です。大学の先生がしばらく外国へ行きますと、それはまた全然ちがうことです。

竹中　理想的な形はなかなかそこではないと思うんです。ただ大学の教授であれ、商社マンであれ、あるいは外交官の息子、娘であれ、小さいときにニューヨークならニューヨークにいて、必ずしもイーストハレムの人たちと一緒に遊んだという経験はないかもしれないけれども、やはり全然ちがった文化のなかにほうり込まれて生活したという子供は、もう一度日本を見直し、外国の人たちと、対等で話す習慣が小さいころからついているのではないかと思います。

シュペネマン　たとえば、ドイツにいる日本人を見ますと、その子供がドイツ人と話す機会がほとんどありませんよ、デュッセルドルフの場合は。学校へ行って、帰ってまた宿題とか、日本とあまり変わりないから、接触がないんですよ。学校はそれを残念だなと思っているから、年に一回、ドイツの学校と一緒に祭りをやる。あるいはドイツの地域または町の祭りに参加する。

恐れることはない

竹中　いまここに感想文があります。K・スギオカという、これは女子生徒のものですね。

仁井　それはニューヨークの現地校から帰ってきた一年生の女子生徒の作文で、こんどこの「時報」に帰国生徒の立場から書かせたものです。

竹中　この方は英語で書くほうが自然なんですね。

仁井　そうなんです。まだ漢字があまり書けませんので、どうしているかというと、たとえば社会とか理科の授業でむずかしい術語が出てきますと、それを友達に英語に訳してもらうんです。持って帰って英英辞典を見て英語で理解する、そういう立場ですから。

竹中　この中に、「友達を得ることはむつかしいのじゃないかと思ったけれども——But on the contrary, I had nothing to fear.——なんら恐れることは何もなかった」という、これがひとつの貴重な体験じゃないかと思いました。

仁井　その点は一般生徒と帰国生徒の間がわりにうまくいっている例証だと思います。

花井　さっき、帰国子女は金の卵ということをおっしゃったですね。生徒にまず、そういう自覚があるのでしょうか。

仁井　生徒にはそういうことは言っておりませんが。

花井　ぼくは、それを大いに言うべきだと。極端に言えばきみらの前途に日本の未来がかかっているぐらいにおだてるというと何ですけど、勇気づけて、しかもシステムとして、かれらがそれこそナッシング・ツー・フィアー、恐れることなくそのエンカレッジされた道を歩めるようなものを、たとえ狭くてもとにかくつくってやる。

具体的に申し上げますと、同志社が国際高校をつくられた、これはりっぱなことだと思いますね。だけどもそこでとどまらず、やはりそれを大学にまで及ぼして、そういう人たちがそれこそナッシング・ツー・フィアーで、(海外の大学にもう一回戻るのもいいと思い

ますけれども)、日本の大学にも入れるという道をつけてやらなくちゃいかんと思いますね。そのために同志社大学も協力していただいて、そういう人たちのためにある種の枠をつくっていただく。こんど立教大学は社会人のために特別な入試をやっておりますね。ああいうふうなことをぜひやっていただきたいと思うんです。ある学部に五人とか一〇人とか別枠を設けて国際高校から入れるというふうに希望を与え、道をつけてやる。そしてアンダーグラデュエイトを日本で四年終える間に、日本文化もいちおう理解できる。そのうえで外国の大学のマスターコースなどにも出る。そうなれば非常にすぐれた日本人の国連職員も出てくると思うんですね。だから国連ではこれだけ日本人が足りないんだ、きみらもどんどんやるべしだということを言って励ますと同時に、そういう道を具体化可能な範囲でつくってやる。そうしたら二〇年といわず、一〇年後に相当インフルエンシャルな人材が出てくると思うのですね。

長期的展望をもって

大下　私はさっきから楽観的なことを言わなかったのですが、国際高校をつくるときも賛成だったんです。だから、すぐすばらしい成果は出てこないし、初期の学校の運営にもいろいろ御苦心があるかと思います。だがやるんなら長期的な展望をもって、一〇〇人のなかからすばらしい者が何人か何年か後に出てくるというぐらいの大きい気持ちでやらないといけない。短期的な目ですばらしい、すばらしいというような調子でやってると、かえって希望の芽を折ってしまうかもしれない。

仁井　やはり一〇年ぐらいかけて成果を見ていただくほうがいいと思いますね。

花井　最低一〇年でしょうね。

仁井　ここに持ってまいりましたのは、二年前の七八年三月の「時報」です。特集が「同志社と国際交流」、そのなかに同志社大学法学部出身の方ですが、「帰国後の子女教育に対する悩みと提言」というのがあるんですね。サブタイトルが「私の息子の場合」――アメリカへ行って、令息の日本に帰ってからの教育のことで悩まれまして、中学校は日本でやるんだと、思い切って中学から日本に帰したわけですね。そのときに帰国子女受入れの問題に関して「せっかく百周年の記念事業の大事なポイントだったら、何とかあれを空文に終わらないようにしていただきたいと思います」と書いておられます。それが二年後の現在、同志社国際高校ができまして、たまたま、きょうそのお父さんから手紙が参りました。国際高校をこのあいだ見せてもらった、いま息子は神戸大学付属中学校におるけれども、来年国際高校を受けさせます、こういうお手紙でございまして、ですからやはり時代は動いていると思いますね。

私は悲観も楽観もしてませんがやはり長い目で見ていただいて、一〇年後ぐらいに一区切りをしたいと思います。

国内適応と国際性の培養

仁井　国内教育への適応の願いは非常に強いので、片一方の国際性の維持というのはなかなかむつかしいんです。それでこれを簡単に思い切りまして、国際性維持なんてもういいんだ、要するにいい学校へ進学できたらいいんだと、こうしてしまって国内教育体制への適応だけにしぼればあるいは気持ちは楽かもわかりませんけど、それじゃ国際高校をつくった意味がありませんので、何とかしてこ

れを両立させたい、そこに悩みがあるんです。うれしい悩みなんですけれども。

花井　ひとつあるケースを申し上げたいのですけど、私がシンガポールの南洋大学で教えていたときに、むこうの教授で国籍が台湾の方がいらっしゃったんです。奥さんは日本人です。おもしろいことには子供を日本人学校にやっているんですよ。いま家族全部で日本に帰られて、しかし国籍はなお台湾国籍なんです。その息子さんはシンガポールで高等学校まで終わって、一ツ橋を受けました。そうすると留学生に別枠があるのですね。そのためにスッとうまく入りまして、将来国際法をやるんだと。日本語ができる、英語ができる、中国語ができますからね、国際法とか国際政治をやればそれだけで大変なプラスなんです。このプラスを生かすことができたのは、たまたま一ツ橋大学に留学生のための別枠があったからですね。

これをもう少し範囲を広げまして、国立大学も含めて帰国子女のためにある枠をとってやる。そこでは別の試験をする。というのは英語の試験ひとつにしましても、いまの大学入試の英語などというのは、外国で勉強したなどということとはまったく関係がないどころか、むしろマイナスでしょうね。しかし本物の英語はやはりアメリカやイギリスの英語なんですから、それが通らないなどというのは実際理屈から言ってもおかしいわけですからね。ですからせっかく本場で鍛えた語学の力がそのままナッシング・ツー・フィアー、恐れずにスッと受け入れられる道はぜひつくってあげてほしいと思いますね。

そのためには、まず卒先して同志社がせっかく国際高校をつくられたのだから、たとえわずかでも大学進学の別枠をつくっていただくようにお願いしたい。そこまでしてあげなきゃ、むしろこれは残酷ですわ。しかも早くつくってあげるということが急務だと思いますね。

大下　制度においても国際高校だけじゃなしに、帰国子女を多様に受け入れることを考えていかなくちゃいけない。ある京都大学の先生がマレーシアの大学を教えに行くとき同志社大学の学生だったお嬢さんもお父さんと一緒について行ってマレーシアの大学に留学した。お父さんは二年後に帰ってきたけれども、お嬢さんはそのまま残ってマレーシアの大学を卒業した。そして日本に帰ってこんどは筑波大学の大学院に入学した。いまは結婚していますが、御主人がアフリカに派遣されていて、その地で普通の日本人ならまいってしまうところを、過去の在外経験をいかしてご主人を大いに助ける役割りを果たしているそうです。

だから帰国子女といっても、国際高校に来る者もいる、あるいは国際高校にこないで外国の高等学校を出てから帰国して日本の大学に学んでいる者もいる、また大学院にもさっきのお嬢さんのような人がいるといった具合になればいいと思います。帰国子女にもいろんな人がいることで、国際高校に来た者も自分たちだけが特別に見られないですむ。それだけでなく、将来のチャンスを広い眼でみることができて、励みになるのじゃないかと思うんですけどね。

松岡　関西分室では相談に応じるときに、東京の首都圏には相当受入態勢が整備されておるのに、関西はどうしてですかと、何回か承りましてね。同志社に国際高等学校ができたということで非常に相談がしやすくなった。きのうも、ドイツのデュッセルドルフに

三人の子供を連れて行く城陽市に住んでいる人がいました。三人とも同志社にごやっかいになれますかというので「ちょっと待ってください、年齢の関係があるから」「なぜ同志社さんは中学部を置いてくださらんのや」と、こういうことまでおっしゃる。

実際には人には言えぬような苦労があると思うのですけども、海外で貴重な体験を積んで帰った子供には、私は内心期待をもちます。これらが八〇年代を問わず、二十一世紀には国際社会場裏にうんと活躍してくれるだろう、これを心からねがうわけです。ようやく日本人学校が日の目をみて一五年ですから、これは相当の日時を要すると思います。

具体的な例を申しますと、アメリカに数年いて帰った人が、地元のある中学校に行って、校長先生に会って相談したところ、「まあ、とりあえず養護学校に入ってみるんだな」と、こういう眼で見られる間は、これはなかなか前途多難だなと思います。ひと月ほどたって、どうもおかしい、日本の学校というたらよく勉強するところと聞いておったのに、どうもおかしいといって母親が行ってみたら養護学級の生徒と一緒だった。そこで勇気を出して学校をかわりました。その後いわゆる偏差値を受けましたら六九出ておるんですよ。それなのにそういうような受入態勢をまことにさびしく思いました。きょうもこちらにおじゃましましたときに、正門前で、新島先生の「良心の全身に充満した丈夫の出で来たらんことを」という碑をみました。なにかしらん国際人というものの根底には人びとに愛される性格が必要でしょう。文部省は「ゆとりと充実」をうたいまして、第一番に人間性の豊かさ、ということ、第二番にゆとりと充実、第三番に基本的なものを正確に身につけるというようなことを言ってますが、人間性とか何とか、いろいろの言い方はございましょうけど、その根底にはやはり宗教的なものがあるのじゃないかという気がいたしますのですが。

国際高校の現状

竹中　ここらで仁井先生にすこし資料もお持ちいただきましたので、現状などから問題点をご指摘いただけたらと思うのですけれども。

仁井　お手もとに、「現況」というプリントがございます。同志社国際高校にはいま現地校、日本人学校の両方を一緒にしましたいわゆる帰国生徒が六七名、国内中学が六六名、合計一三三名。昨日編入試験をいたしまして七名入りましたのですが、それは別にして五月現在で一三三、だいたい帰国、一般生徒半々になっております。（表1）

表1　生徒在籍状況

	1980. 5.1			1980. 9.1		
出身校	男	女	計	男	女	計
現地校	17	9	26	22	15	37
日本人学校	27	14	41	28	18	46
国内中学	28	38	66	28	38	66
合計	72	61	133	78	71	149

（注）　7月8月に編入考査を実施した

まだ両親が海外におられるという生徒が相当おります。この夏休みも海外に帰りました。そのときに一般生徒を連れて行ったんですね、お友達を。これは非常にいいと思います。一般生徒がむこうのホームステーに入りまして、貴重な経験をすると思います。

それから日本に帰るまでにいた国々をみま

表2　帰国生徒在留地一覧

米国	25	メキシコ	1
英国	7	マレーシア	1
西独	5	コスタリカ	1
南アフリカ	1	ベネズエーラ	1
ホンコン	2	フィリッピン	2
韓国	2	ギリシア	1
フランス	3	ベルギー	3
シンガポール	12	オーストラリア	1
アルジェリア	2	アルゼンチン	2
ブラジル	3	デンマーク	1
タイ	3	インドネシア	1
台湾	3	(23ヵ国)	

表3　寮生現況

	1980. 4. 1			1980, 9. 1		
出身校	男	女	計	男	女	計
現地校	15	4	19	19	10	29
日本人学校	23	8	31	23	11	34
国内中学	12	10	22	11	13	24
合計	50	22	72	53	34	87

すと二三カ国ですね。（表2）

それから私たちが考えていた以上に寮は必要でございまして、帰国生徒の八割ぐらいは寮に入りますね。まだご両親が海外におられるとか、あるいは自宅が東京方面にあるとか、国際高校の場合には寮のウエイトが大きいと思います。ということはまた、寮の運営がなかなか重要なことになってきております。（表3）

次に習熟度別授業でございますが、数学と国語と英語、これはホームルームは別にございますけれども、プレースメントテストと面接をしまして、グレードによって分けておるわけです。これがわりあいにうまくいきまして、とくに面接をして、ちゃんと本人が納得したうえであなたはこのグレードですと言いますので、いわゆるグレードがちがうための劣等感とかそういうものはいまのところ見受けられません。中間テストの結果によりまして、そのグレードをかわるわけですね。上へ上がったり、下がったりするわけです。

このなかでいちばん苦労しているのは、国語科のなかの特別指導クラスというのです。これに入っている生徒というのは、たとえば、こんどの入学試験ではじめて日本に帰ってきた、ずっと現地におったという人がおりますね。ですから漢字の習得が非常にむつかしい。現在どうしているかと申しますと、漢字のたくさん入った高校一年生の現代国語の教科書がございますね。あの漢字が十分読めません。それで友達に教科書のテキストを読んでもらって録音しまして、それを聞きながら、あ、この漢字はこう読むのだとかいって勉強している。非常に涙ぐましいんです。そういう苦労はしていかなくちゃいけない。私はきのうの編入者を迎えたときの話でも、きょうから私も皆さんといっしょに苦労しましょう、国内教育への適応ということは簡単なことではないのですから、ということは申し上げました。

英語のほうは、逆に海外から帰った人はセミナーコース、いちばん上のグレードにおる人が多いわけでして、国内の人はチュートリアルコースに入っておりますね。これが週六時間ございますが、生徒が喜んでおりますのは、英語の特講です。（表4）これは六種類あります。この代りにドイツ語、フランス語、スペイン語のどれかを取ってもよい。こういう仕組みでございます。おもしろいのはジャパニーズカルチャー、これはワトキンス先生というデイビィス先生のお孫さんがやっておられまして、法隆寺とか平等院などの説明をスライドを使ってなさるのですが、いかにわれわれ日本人が日本文化を知らないかということがわかりますね。かえって、こうい

表4 英語特講

Special Courses in English	
Japanese Culture	Virginia D. Watkins
Art of Living	Laura R. Fukada
Investigation into Nature	Donald Kelman
Appreciation of Literature	Hisako Sasaki
Public Speaking	Hillel Weintraub
Audio-Visual Programmes	Hirofumi Matsuo

う方のほうがよく研究しておられることがわかります。アート・オブ・リビングというのはミセス深田の担当で、クッキングをやっているわけですね。男の子もエプロンをつけまして、料理室で料理しながら日常会話を習っている。もちろん一般生徒も参加しております。

それから自然探究、文学鑑賞、その次にございますパブリックスピーキング、これは専任の米人教師がやっておりますが、さきほど花井先生が、国際人の特色のひとつは外国人と気遅れしないで対等に話をするとおっしゃいましたね。そのために、このパブリックスピーキングで自分がどういうことを人の前で論理的に述べられるかという訓練をしています。これは非常にいい選択科目ではないかと思っております。

このあいだ、生徒会の選挙がございましたときに、その管理委員長も、それから応援演説とか立候補演説をした者も、大部分が帰国生徒なんですね。かれらのほうが、われわれ教師よりも上手に自分の意思を発表するのです。頭が下がりました。全然照れないんですね。ちゃんと言うわけです。応援演説をする一般生徒の方が照れました。そういうことを見ていると、やはり帰国生徒はいいものを持っていると思いますね。そういうところは何とか伸ばしていきたいということを感じるわけです。

花井 これを拝見しまして、ぼくはいちばん興味を持ちましたのは、パブリックスピーキングというクラスがあって、とくにそこで帰国生徒が遺憾なく能力を発揮しているということです。ぼくは、これがいちばん日本人に欠けているところだと思うんですね。これがないために国際社会でどれだけ損しているかわからぬわけですね。こういう能力こそ、励まして伸ばしていく。その能力が日本にとって非常に必要なんだ、だから国内の教育制度に合わせる必要があるにしても、この能力だけは失わないように大事に育ててくださいと生徒たちにも言い、かつ学校もその点ではできるだけの助力をしてあげてほしいですね。

仁井 おっしゃるとおりと思います。

シュペネマン 現地校から来た人を将来にふやす見通しがありますか。

仁井 私どもとしては、現地校の人が日本人学校の人よりも多くなるのではないかと考えております。ただこれは松岡先生のご経験のことですけども、保護者の方も迷うわけですね。本来は、海外におったら現地校に子供をやりたい、そのほうが国際的な視野が開けますから。だけども日本に帰ってからの受験のことを考えると、現地校ばかりにおったのでは困るだろうと。だから現地校に四年おりまして、帰国前の二年ぐらいは日本人学校に入って帰ってくるとか、そういうケースが多いですね。現地校と日本人学校両方行っている人が多いんです。

個性と交流

シュペネマン　現地校に行った人は、タイプとしてちょっと変わるわけですね。だから日本人学校出た人と、国内学校を出た人と、現地校出た人とまぜると、それは非常に生徒にとって教育になりますね。考え方はちがうし、言葉の使い方だけじゃなしに、やはりちがったタイプですね。

花井　ぼくは専門違いですが、この問題はほんとに調査してみたいと思うんです。この追跡調査と、グループを分けて、それがどういうふうに適応していくか。どういうタイプが早く適応するか、どういうタイプはどういうときに適応できて、どういう問題で適応できないとか、これは教育学の問題でものすごく興味のあるプロジェクトだと思いますね。ですから、ぜひ同志社大学でもいいですし、教育大学でもいいですし、あるいは阪大の人間科学科、ああいうところとお話なさったら、ものすごい興味をもってやると思うんですね。国際交流なんかのいいプロジェクトテーマですが、そういうお話はまだないわけでしょう。

仁井　いまのところ、ありませんね。

花井　これははじめからスタートされるといいと思いますね。ずうっと継続していって比較をされ、追跡調査をされる。それは日本の教育学全体に対する大きな影響を与えると思うんですよ。それと国内的な教育を受けている学生とどうちがうか、そういう比較が今後五年なり一〇年にわたってされていますとおもしろいテーマだと思いますね。

仁井　帰国生徒センターがございまして、そこにファイルがあって全部資料を保管し、研究を始めております。

松岡　国際理解ということの出発点は会話ができるということも非常に大事なことだと思います。日本語でものを考えるというようなことについて、一年のときにアメリカへ行って、いま六年めを迎えておる生徒が一時帰りましたときに、あなたはもう英語が自由自在だが、ものを考えるときには何で考えますかと質問してみたんです。やはり日本語だと……。シュペネマン先生はいかがですか。

シュペネマン　日本のことを考えるときは日本語で考える（笑）。これは非常に重要なことですよ。というのはフランス語、英語、ドイツ語は似てますから、ドイツ人がわりあい簡単に英語かフランス語でものを考えることができる。ところが日本語と英語は言葉だけじゃなくて、考え方が全部ちがうわけです。たとえば、父親が日本人で、お母さんはドイツ人で、家でドイツ語を生かしたい。だから家でドイツ語をしゃべって、子供は外で学校や友達は日本語です。それは子供にとって大変なアイデンティティーの問題になります。結局、外で日本語で体験することは、家のなかで絶対ドイツ語で表現できない。言葉がないからですね。そして言葉の問題だけじゃなくて、考え方がまったくちがうわけです。とくに子供は自分のアイデンティティーのために、どこかでその根をおろすところがなければ成長しない。だから私は、子供があまり早く完全に英語をやると、その子供によくないと思いますよ。日本人が自分の言葉、自分の文化、自分の歴史をよく知らなければ、それは国際人にならないと思います。

ですから私が日本のことを知るのは、知るだけじゃなくて、安心できるアイデンティティーのためにたいへん必要だと思います。日本人がアメリカナイズしますね。あの人たち

は国際人じゃないと思いますね。まだドイツ語で「畳化されたドイツ人、」ドイツ人同士でよくそういう言葉を使います。日本人になったドイツ人。結局、国際人になるためにはちゃんとした根がないとだめだと思います。

大下　ぼくもその問題を思うのです。それで仁井先生にうかがおうと思っていたのは、現地の学校へ行った者、日本人学校へ行った者、そして日本で育ってきた者、――一般生徒ですね――は、おたがいにどういう影響を与えているのでしょうか。お互いにかなり交流はあるのでしょうね。

仁井　交流はとくに女子の場合、よくありますね。男子の場合は、最初は帰国生徒はそれだけでかたまったような動きがありましたけど、女子は最初から、その作文にもありますように一般生徒との間で友人ができておりますね。

大下　一年間アメリカに子供を連れて行ったときの経験ですけれど、女の子はすぐ友達ができましたね。男の子は本人の性格もあるんだろうけど、はじめはすこしむつかしかった。しかし、スポーツをやるようになると、スポーツの仲間をとおして、急に女の子以上に適応していきました。国際高校でもスポーツとか、いろんなクラブ活動の面での接触が役立つ可能性はありますね。

仁井　体育関係のクラブで非常に接触できると思いますね。

花井　それから、そういう者同士が寮でルームメートになるとか、そうするとお互いに持っているプラスを影響すると思いますね。

大下　一般学生が国際高校に行くのは本人の希望もあったでしょうし、親の希望もあったのでしょうけど、どういうところに希望を持って来たのですか。

仁井　それは調査をしましたら、将来国際社会で活躍をしたいという希望は非常に多いです。

大下　その気持は大切ですね。

松岡　きわめて初歩的なことをうかがいますけど、私の見通しでは、いままで商社とか企業の方々がこちらに帰国する際には、受入態勢が不備だから首都圏に帰してくれと、企業に対してこういうことすら言って海外に行く方がある、それがこんどはだんだん減ってきますから、その場合に、同志社に帰国子女が押し寄せてきたときに、三分の一の国内生徒は控えても海外生徒をたくさんに採って下さいますか。

仁井　一般生徒は定員の三分の一をこえてはならないという枠があります。これは六六名です。しかし帰国生徒については三分の二をこえてもよいことになっています。ですから将来帰国生徒がふえてきましたら、一般生徒は六六名より減るかも分りません。

松岡　それを減らしてもいいのですか。

仁井　いいんです。どこまでも帰国生徒受入れが主なる目的ですから。

竹中　本来の精神がそうですから、そこで主な教育ができればいちばん趣旨にかなっているわけですね。

松岡　これまで関西方面に帰ってくる方はほとんど中学校でおじいさん、おばあさんのところへみな帰すのですが、こんどは安心して外国で学ぶことが出来るようになると思います。

大学進学制度の確立

花井　そういうためにも、せっかくそういう志を持った生徒たちがその目的をある程度達せるように、やはりシステムづくりをして

あげなきゃいかんですね。

大下　同志社大学で受け入れるのは当然ですが、それ以外に、慶応のように海外の高等学校を卒業した人を入れている大学がありますね。これをすこし拡大して、幾つかの大学が日本の国際高校を出た帰国子女を入れてくれるようになるとよいと思います。

花井　とくに外国語大学とか、外国語学部を持っている大学なんか、一斉にそういう開く方向へ行くべきだと思いますね。上智なんかすでにそういう傾向が出てきまして、特別英語の上手な同時通訳とか、スペイン語の上手な同時通訳なんていうのは、聞いてみるとたいてい商社マンの息子や娘で長いこと現地にいて、たまたまちゃんとした試験を通ってやってきているのですが、もうちょっとそういう人たちが入りやすいような試験の仕方をしてやったら、もっともっとそういう人材が出てくると思うんですね。国際高校を持った大学は当然としても、それ以外にも外国語大学、外国語学部などはやはり別枠を設けて、そういう人たちが入ってきやすいようなシステムをつくるべきだと思います。

仁井　そういう別枠がいただけたら非常にありがたいですね。

花井　大阪でも、たとえば大阪外国語大学とか神戸外国語大学とか、関西外国語大学というふうなところが、それぞれ別の試験によって力があれば入学させるということであれば、ずっとパリにいたとかいう子供がフランス語学科に入ったら、それは大変なものですよ。そしてそれは周囲の学生にどれだけ大きないい影響を及ぼすかわからんですからね。スカラーシップをやって入れてもいいくらいですからね。おそらく発音なんて、先生より上手でしょうからね。

シュペネマン　大学の先生、困るなあ(笑)。

竹中　刺激になりますね。

花井　だから、いまでもそういう生徒を普通の高等学校にやって、たとえばホームルームで英語でディスカッションするとか、フランス語でディスカッションするチャンスがあったら送り込みますよと。それでやれば、おそらくものすごい自信を持つと思いますね。そういう自信をつけるチャンスをできるだけつくってやる、そして自信を失うことをできるだけ少なくするということを、むつかしいと思いますが、きめ細かくやっていただきますと、それがナッシング・ツー・フィアー(恐れることはない)に結びつき、必ずすぐれた人材になっていくと思いますね。

シュペネマン　さっき大下先生がおっしゃった日本の国内の学校を出た生徒のために、外国から来た生徒の経験を生かすべきだと。私は同時に、みんないろいろな国から集まっているから、外国から帰ってきた生徒同士の経験の交流とかを考えるべきではないかと思っています。それは授業ではなかなかできないだろうか、寮生活の場合はそういう可能性があるのではないか。たとえばイギリスの寄宿舎のある学校、ドイツのプライベートスクール、などいろいろあると思います。寮生活は教育の非常に重要な部分ですが、ある程度まで授業と寮生活を結びつけて、長く学校にいなければならない先生方の負担がしんどいと思いますけれども、こういうインフォーマルなグループワークとか、いろんな形で経験をお互いに伝える場所が大切であることは確かですね。

花井　それからもうひとつ、学校自体を中学校や高等学校の英語の先生とか、そういう人のトレーニングセンターにしてもいいと思

いますよ。そのなかに生徒をはめ込んで、すくなくとも発音においては先生方をリードできるぐらいの力を持っているのですから。

竹中　いま寮の話が出ましたが、だいたい半分よりすこし多いぐらいが入ってますね。これはまだニードというか、要請もあるわけですか。

仁井　このままでいきますと男子寮は不足するかもわかりません。

竹中　ほかの方法を何か考えんといけませんね。

自然に生き生きと

仁井　それから私どもではいまバイリンガルクラブというのがございまして、海外経験をしてきた人が順番に自分のおった国の紹介をするわけですね。そのときは非常に生き生きしてやってます。持って帰ったいろんなスーベニアを見せましたり、地図を張ってみたりしまして……。

花井　生き生きしているというのがいちばんいいと思いますね。その生き生きしているところが、非常に幸いなことには日本にとっていちばん欠けているところなんですよ。そこをうんと伸ばしてやれば、日本にとって大変な力となると思います。二十一世紀の、日本が国際社会で大きな役割りをするときに、大きな要素になると思うんです。もしそのことのためなら出かけていって、きみらはほんとうにこういういいところがあるのだよ、ということをぼくの口から言ってやりたいぐらいですね。

竹中　自発的なボランティアが出ましたな(笑)。

仁井　ほんとに心強いです。ありがとうございます。

花井　極端に言えば、きみらを生かせずして日本の将来はないというぐらいに大げさに言ってやりたいですな。

松岡　それを文部省に言っていただきたい(笑)。

竹中　「同志社時報」もいろいろ各方面に出ますから。

シュペネマン　国際高校に入った生徒はある程度までエリート意識を持っている可能性もあるかもしれませんが、そのエリート意識がそれより強くなるといいかどうかな。また考えますね。

竹中　べつにエリートとか、反対に自己卑下して、悲観論になっているとかいうのではなくて、感想としてはその生徒たちはどうですか。

仁井　エリート意識とシュリンクしているのと、とくに漢字の習得なんかありますね、両方入りまじった複雑な気持だと思いますね、いま。非常に不安定ですね。

竹中　私は北京で生まれまして満州で育ちました。そのころの満州にいる日本人というのは、日本から言えば開発会社ですが、現実には侵略のエリートだったわけで、その子供たちなんですね。ですからシュペネマンさんのご指摘のような限定は持ってたんですね。ところが私自身が小さいころの経験で何を覚えているかと言ったら、ロシア人の子供と遊んだこと、中国の子供とけんかしたこと、すごいけんかしたことがあります。

小学校四年のときに、中国語も勉強し始めたころでこれからおもしろくなるのに日本に帰ることになりました。しかしお前は帰れ、日本で適応せないかんというわけですね。受持の先生が、わざわざ土曜日に私を残して、一対一で補習をするわけです。お前は日本に

帰ったら受験勉強があって、漢字はまだこれだけやらんといかん。ほかの友だちは野球をやっておるわけですよ。私も野球のチームのメンバーでやりたくてしょうがないのが、土曜日の午後は漢字をやらされて、とてもいやでしたね。こうまでして日本に帰るかと。

日本に帰ってきても、先生に、ぼくを別扱いせず、これぐらいはお前、日本人だろう、覚えろ、というわけでやるんですね。あのころは、やる気だったら相当伸びると思いますね。一〇代の若い人びとはかなり伸びると思うんです。やはり甘やかしちゃいかんと思いますね。

花井　ぼくは、国際高校を出て必ずしも日本の大学に行かんならんという必要もないと思いますね。せっかく外国で教育を受けたアドバンテージを持っているのですから。だけどもさっきからシュペネマンさんもおっしゃってますけれども、やはり日本人であるかぎりは日本を知らなきゃいかん。そういうことは大切なんですから、それのために日本でいま教育を受けるということは非常にいいことだと思いますね。しかし、さらにもう一度外国へ出て、外国の大学教育を受ける。そのときには持っている語学力というのは有利になるわけですからね。そのうえで、たとえば国連で日本人職員として活躍するとか、これからは国連だけじゃなしに企業も、あるいはさまざまな分野で、そういう言葉がバイリングラルだけじゃなしに、二つの世界を熟知しておるという人材が必要になってくると思うんですね。とくに商社なんか、そういう人材をどんどん要望するようになっていると思いますね。ですからなにも日本に閉じこもらなきゃならないということはないんだと、ぜひかれらに教えてやってほしいと思いますね。

さっき、目的が大きく言えば二つある、一つは外国で培った能力をどう伸ばすかという問題、一つは日本の教育にどう適応するかということがありましたね。二つ一ぺんにやるというのはやはりむつかしいだろうと思いますけれども、個人としては第一目的と第二目的の二つの目的のうちどっちにより向いておるか。国内に適応するよりは、海外で培った能力をより伸ばすというふうに向いているなら、むしろ海外に道をつけてやる。しかし海外から帰っても国内にアジャストできるということであれば、国内にアジャストする。その目標のほうへより重点を置く。その子供一人一人によって優先順位がやはりあると思うんですね。

仁井　現にそういう徴候が見えてますね。

大下　それはアメリカだけじゃなしに、フランスとかドイツというようなことでも出てきますか。

仁井　生徒によってはイギリス、フランスに戻りたいらしいですね、大学は。

日本のための国際化か…

シュペネマン　ひとつのさきほどの話のテーマは日本の国際化でしたね。中心が日本だと。次に、こういう国際的な教育を受ける人は、これからの国際社会のリーダーになる。日本のことはちょっと言いたくないのですが、私はもしドイツにいたら、絶対、ドイツのためにこういうことをやらなきゃならない、またドイツの国際化のためにこういうことをやらなきゃならない、またはドイツ人であるからがんばることができるとは言えません。とくに私は戦争が始まったころ生まれて、私の世代にとってドイツという国の名前は、その言葉は非常に使いにくい言葉になり

ました。結局ドイツよりもヨーロッパと言わなければならない。ヨーロッパよりも、最近たとえば第三世界に対する責任とか、そういうことをよく言わなければならない。私はもしドイツで国際高校の現場に行ったら、たぶんきみはアフリカや南アメリカに行ってそこでいろいろなことを経験した。それでいろいろな能力がある。それをその国のために生かしたらどうか。それに重点を置いて、自分の国、自分の社会のためよりも、ほかの国のために自分の才能を生かしたらどうかと。

最近、非常に印象的だったことは、三年前にドイツに帰ったときに、高校生が道端でテントを張って「第三世界店」という看板を出して、そこで教会を通してアフリカに注文したコーヒーの豆とか手づくりのものを売るわけです。そして利益を教会の組織を通してアフリカへ返す。私はその高校生と話したのですが、きみたちは何のためにこれをやっているかと。そうしたらおもしろいね。あの高校生は「私はドイツ人としてアフリカの未開発の国に対して責任がある。だから自分の力でその国のために何かやるべきだ」と。ですからそういうことをやっているわけです。それを大人の立場として考えると、当然なことに子供っぽいです、その考え方は。大したお金じゃないから未開発の問題は解決できないけれども、自分の国以外のことをよくあの高校生が考えているわけです。

自分のためじゃなくて、自分の国のためじゃなくて、遠くの人、遠くの国のために何かやるべきだと、こういう楽観的かもしれませんが、夢であるかもしれませんけれども、あれはほんとにうらやましいね。せっかく第三世界の国々の経験も多いから、これをすこし生かしたらどうか。私はちょっとロマンティックであるかもしれませんけれども、若い人が他者のために何かやるべきだという夢がないと、もう伸びませんね。

夢は大切に

竹中　国際高校の聖書を教えていらっしゃる小池先生は、神戸の学生青年センターの館長さんだったんです。そこからこんど移ってこられた。その送別会にぼくはたまたま出たんです。そしたら青年たちは、小池先生、どうぞ行ってしっかりやってくれ、そして、これからの第三世界のなかで働いていくような日本人をつくってほしい。マレーシアのサラワクに、労働者伝道の仲間であった荒川純太郎牧師が働いているのですが、神戸学生青年センターの人たちは、荒川さんの働きを支持しているんですね。荒川の息子、娘が大きくなって日本に帰ってきたら同志社の国際高校へ入れてやってくれ、そしてそれがまたサラワクに行くように教育してくれと、これはちょっと理想主義的な点がありますが、その子供が帰ってきて、またサラワクの土になる、そういう日本人をほかの学校では受け入れないかもしれないけれど、われわれのところは受け入れて教育するぞ、こういうようなものが全体のなかには含まれていいのではないでしょうか。そういう夢は大切だと思います。

大下　海外で日本の企業の利益のために働いていても、現地の文化を理解して、現地の社会のなかに意味を持つような活動をするという感覚がありませんと、これからはやっていけないですね。そういう意味で、国際高校で学んでいて、アメリカ帰りの生徒が、第三世界の国から帰ってきた子供と経験を分け合って成長するというのはすばらしいことです。子供のときに友人から聞いた話といった

ものは案外印象に残りますからね。

仁井　いま、サービスクラブというのがありまして、メンバーの大部分が帰国生徒なんですよ。ミーティングのときは英語でやりますから非常に生き生きやるのですが、指導者がワイントラウプというアメリカ人ですけど、カンボジア難民のことをやろうと。それで、このあいだ、大阪のＹＭＣＡまで生徒も行きまして、フィルムとパネルを借りてきて展示をしましたし、募金もしているし、たえず難民の記事が出ると日本語と英語で掲示するわけです。先生がおっしゃった他の国のことに関心を持つ意味では、非常にいいと思うんですけどね。

大下　仁井先生は同志社のほかの学校におられて、こんど国際高校にいかれた。国際高校の生徒は、そういう感覚の面で他の学校の生徒とずいぶんちがいますか。

仁井　ちがいますねえ。

同志社の国際高校

竹中　いろいろ国際教育のあり方についてお話がありましたが、同志社がこういうことを創立百周年を記念して始めたということを考えてみたいと思います。ある点では時代の要望にも応えていかなくちゃいけないということもありましたが、ひとつには同志社の立学の精神であるキリスト教の精神によるものと思います。それは、創立当時においては非常に困難なものでした。それを継承して創立百年に当たって相当犠牲もあり、苦労は覚悟だけれど、やはりこれはやらなければいかんというので始まったのが同志社国際高校じゃないかと思います。

そういう点から皆さん方にひとつ忌憚のないお励ましなり、忠告なりをいただけたらと思います。

大下　ぼくも、竹中先生が言われたことに共感を覚えています。それで、さっきからの話と関連して言いますと、いい意味のエリート意識を持たなくちゃいけない、しかし、エリート意識だけが先行してもいけないと。数年前のことですが、同じ「時報」の座談会がありました。そのとき、同志社は良心に生きる教育なんで、国立のようなエリートをつくるのじゃないという意見が多くて、私はもっとエリート意識を同志社の学生に持たせなければいけないと言ってた少数派なんです。同志社の良心教育というのは、力強い精神、一種の使命感のようなものを養う必要がありますね。とくに帰国子女には、自分の育ってきた環境、自分に与えられたたまものを積極的に活用して生きていくのだという自信を持たす教育をしてほしい。国際高校は、その意味で同志社精神をより生かすことになるのだと思うし、同志社全体がそれを支えているという気持にもっとならなくちゃいけないんだという気がしますね。

竹中　エリートというと、なにか大衆から分離するような感じですけれど、そうじゃなくて使命感を持って大衆とともに働く精神といってもよいでしょう。

花井　同志社の建学の精神がいまおっしゃったようにキリスト教の精神と、もうひとつ国際主義というのがありますね。この二つは、はからずも国際化の時代にとって貴重な重要な二つの概念なんですね。国際主義というのはさっきおっしゃったように、日本というものを超えて世界へ広がっていく、そこにひとつの使命感を見出すという、いま非常に重要なその精神が建学の精神であると。もうひとつ、そういう使命感を裏打ちするものと

して、宗教的なものは無視できない非常に強いものだと思いますね。そのなかでキリスト教というのは広がりにおいてはいちばんユニバーサルなものですから、キリスト教と国際主義というものが二つ兼ね備えられておるということは、ぼくはたいへんいまの時代にとって貴重だと思いますね。そういう精神が、百年という一世紀を経た今、国際高校の実現のうえに反映されてきたということは、さすがにやはり同志社の伝統だなと思いますね。東京ではＩＣＵしかないわけでしょう。あるいは暁星ですか。慶応でさえ、それはできてないのですからね。ですから、ここではほんとうに同志社はいいことをされた。ぜひそれを、ただ同志社のものだけにしないで、地域社会あるいは日本、さらには世界へ広げていくようなものに、たいへんご苦労もあると思いますけど、育て上げていっていただきたい。われわれ外部の者も、それこそできる範囲でお手伝いできることがあったらぜひさせていただきたいと思ってます。

松岡　この海外子女教育、それから帰国子女教育は、おそらくわが国の教育史の一ページを飾ると思います。私はじつは昨晩「同志社百年の歩み」、あれをもう一度読ましていただきました。私、いま高校の講師をちょっとやっておりますが、教育ということを考えましたときに、海外子女、帰国子女教育は、実際やってみたらほんとうに実践者には人に話せないようなご苦労があると思うんです。ただそこで、これは教育者全般に言えることと思いますが、恒久実践の源泉をいったいどこに求めるか。このあいだ、海外にいらっしゃる先生との話し合いにおきましても、若いときにはいろいろな動機やら意欲があってしかるべきだ、しかし恒久実践的な源泉をどこに求めるか。こういうことをいつも微力ながら考えていますが、私はそれが新島精神じゃないかというような気がいたしました。

竹中　新島さんの伝記を見ましても、あの人が出国してずうっと航海日誌をつけて、約一年間かかってニューイングランドへ行くんですね。上海で船を乗りかえてマニラに行ったり、ずっと東南アジアを旅してゆく。そのときに、東南アジアの人たちをある点では下に見た日本人の感情が卒直にそのまま記されているんですね。ところが、かれはニューイングランドでキリスト教にふれて、一〇年むこうで研鑽して帰ってきて、それこそアジャストメントは大変だったわけですね。そのときに新島は非常に国際人になって帰ってきたと思うのです。新島はもちろん、いまの帰国子女と考えている一〇代の人ではなくて、むしろ二〇代の後半から三〇代のはじめですからだいぶちがいますけれども、やはり海外に行った一〇年の経験というものは、新島をして広い世界から人間をとらえキリスト教主義に根ざした人間づくりをしようとする動機になったと思うんですね。そういう点からも、私は同志社の国際高校というのはある点では新島が校祖であって、おれは帰国青年であったということを考えるべきじゃないかと思います。

シュペネマン　私は教育と関係のある三つのことが大切だと思いますが、ひとつは、ある程度まで個性の意識といいますか、ほかの人ができないことを私はできる。たとえば数学は下手かもしれません、そのかわりに私は英語がよくしゃべれる。漢字はむずかしいですが、しかし一〇年間ニューヨークに行ったので、これは私の宝物だと、こういう意識は強くしなければならないと思いますね。これ

はひとつの大切なことです。

もうひとつは、ちょっと宗教的なことになりますけれども、自分のためじゃなくて、さきほども申しましたように、ほかの人のために私が勉強する。私が持っているお金とか能力とか、これは預かったものですが、それを人のために生かすべきだ。こうしたビジョンがないと勉強も楽しくならない。

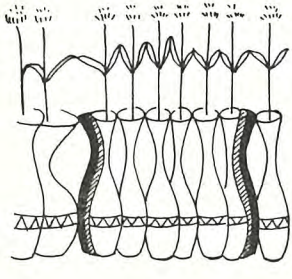
第三は、これちょっと説明しにくいことですが、勉強で失敗したとしても、私の働きと私の人生に価値があるということです。トップの大学に入らなくても、私の能力と経験を人のために生かせる場所がある。これは正しいエリート意識だと思います。だから、どうしてもあとでいい大学に入らなければならないということがなくても、それほど勉強できなくても、やはり私の人生に価値があると。言いかえますと、きびしい勉強のうえに立ってしかし、もう少し気楽に勉強して欲しい。知識以外に非常に意味のあることがいっぱいあります。半分遊びとして勉強しないと上手に勉強できない。この三つのことが大切だと思いますね。

仁井　ほんとに先生方からお励ましいただきましてありがとうございました。いろんな苦労はこれからもあると思いますけれども、新島先生の目ざされた理想を考えまして長い目で見ていただきたいと思います。教職員はきょうもあすも研修会をやっていますけれども、ほんとにみな一丸になっておりますので、その開校早々の初心を忘れないでやっていきたいと思います。先生方には今後ともご指導、お励ましをお願いしたいと思います。

竹中　長いようでしたけれども、もう限られた時間がまいりましたので終えなくてはいけませんが、いま仁井校長がおっしゃったように、同志社国際高校は開拓期の苦労を、しかしビジョンを持って歩んでいると思います。私はこういう言葉を思い出します。Be favorable to the bold experiment――こういう開拓的な実験に対しては、みんな好意をもって協力し合おう――私はこの言葉は、同志社国際高校を育てようとする全同志社人が持つべき言葉じゃなかろうかと思います。どうもありがとうございました。

花井　どうかがんばってください。

仁井　ありがとうございます。



U.H.